

ビス語の研究

タイ国北部におけるビス族の言語の予備的研究

西田 龍 雄

A Preliminary Study on the Bisu Language

— A Language of Northern Thailand, Recently Discovered by us —

by

Tatsuo NISHIDA

まえがき

1964年9月から1965年2月にかけて、私はタイ国北部チェンライ県とターク県において、ビルマ・ロロ語系に所属する言葉をいくつか調査した。¹⁾ この地域には、タイ語系の諸方言にまじって、²⁾ ビルマ・ロロ語系の言葉が、とくに山地一帯に数多く分布していて、私達にとっては、ビルマのカチン州、シャン州と並んで極めて重要な調査地域をなしている。

チェンライ県とターク県には、Akha 語, Lahu Shi 語, Lahu Na 語, Lahu Ni 語, それに Lisu 語が、いくつもの村落で話されており、しかも村落ごとにやや違った形態を具えている。もちろん、タイ国にいるこれらの部落の言葉は、全体として、シャン州、カチン州にいる Lahu 族, Lisu 族, Akha 族の言葉とも、中国雲南省に分布する同部落の言葉ともかなりの差異をもっている。今回の調査で、私が調査の対象とすることが出来たのは、この中、アカ語, ラフ・シ語, ラフ・ナ語, リス語であるが、そのほか、この調査のもっとも最後の時期に出会ったのが、³⁾ ここで報告するビス語である。

ビス語の分布

1. ビス語、ビス族の存在は、管見の及ぶ限り今までに報告されたことがなかった。少なくとも

- 1) この調査は、本東南アジア研究センターの第1次5カ年計画の一つとして行なったものである。言語班は私のほかに、三谷恭之、桂満希郎が加った。この調査に多くの援助を与えていただいたタイ国学術研究会議並びに内務省の方々に厚く感謝しなければならない。
- 2) この地域には、いわゆる Khammyag (北方タイ語) とよばれる言葉が分布しているが、これには Chiangmai の方言, Chiengrai の方言, Lampang の方言, Lamphoon の方言など、あるいは、それらの中でも、もっと細かい相違をもったいくつもの変種がある。cf. Herbert C. Purnell. *A Short Northern Thai—English Dictionary*. Chiangmai, 1963.
- 3) ビス語の調査には三谷恭之氏の協力を得ている。私の調査全般については、拙文「タイ国北部の言語調査について」『東南アジア研究』3巻3号, 1965. を参照されたい。

も、この名称に関する限り、新発見の部族であり言葉であるといっても誤りではない。この言葉の話し手たちが、自称をビスというから、彼等をビス族そしてその言葉をビス語と名付けるのも当然許されるであろう。

ここで取り上げるビス語は、チェンライ県チェンライ市の南方約 23 km の地点にある Ban Huai san から西に約 10 km ほど入ったところの村落 Ban Lua (ルア村) において話されている。これを Ban Huai san の Ban Lua Bisu 語、略してバン・ルア・ビス語と呼ぶことにする。このほかにもわかっている限りでは、Ban Huai san よりさらに南西方 45 km ほどの地点にある Ban Tha ko において、今はほとんど話し手がなくなっているが、老人のみが同種の言葉を記憶していると三谷氏が報告している⁴⁾。その言葉をバン・タコーのビス語とっておこう。また別の一地点においても、同種類の言葉が話されているという情報を得ているが、これは確めていない。タイ国内の他のいくつかの部落でも、ビス語が今なお話されていることは十分に予測できる。それらの発見は、今後の調査をまたねばならない。

何故か理由は明瞭にはわからないが、このビス族は、近隣のタイ族からは Lawa 族(タイ語で lua) とよばれている。

このように呼ばれるのは、ビス族がもともとはラワ族であって、ある時代にビルマ・ロロ系の言葉を話すようになったためなのか、あるいはビス族はやはりビルマ・ロロ系の1部族であるのだが、何らかの理由でラワ族と称するようになったのかは、いまは決定する根拠をもたない。大体、ラワ族自身の正体が今でもよくわかっていないのである。しかし、かつてはビルマ、タイ地域でかなり大きい勢力をもっていた部族であったことは、ほぼ間違いがない。タイ国内でラワ族と称されている部族の中には、なおビルマ・ロロ系の言葉を話す部族がいることは十分にあり得る。

2. このバン・ルア・ビス語が、これまでに知られていなかった言葉であることは確かであるけれども、これと類似した性格の言葉は、今までにタイ国内のラワ語の一種として⁵⁾、ラオスのプノイ (Phunoi) 語という名称のもとに⁶⁾、そしてビルマ・シャン州ケントンにいるピエン

4) 三谷恭之「ラワ語の現地調査」『東南アジア研究』3巻1号 1965, p. 153

5) Dr. A. F. G. Kerr, "Two Lawa Vocabularies." *JSS*, 21, 1927. ここで2つの Lawa といっているのは、チェンマイ県チェンマイ市の南西方にある Baw Luang 村のラワ語と、Kānburi 県にいる Lawa 族の言葉を指している。前者には Kerr 氏が1922年におとずれ記録した単語48語をあげ、後者には Kwéyai のラワ語86語と Kwēnoi のラワ語34語を、ポールワンのラワ語とは似ていなくて、リス語アカ語に近いチベット・ビルマ語系の言葉として提出している。表記もあいまいであり、声調の記録もない。

6) Henri Roux, "Deux tribus de la région de Phong Saly (Laos Septentrional)" *BEFEO*, 24, 1924, pp. 489~500. Roux 氏はここで P'u-Noi 語542語を提出する。Roux 氏は同じ論文で紹介した Akha 語とともに、この言語をどこに分類すべきかわからなかったが、R. Shafer が、ビルマ語とロロ語の中間言語として注目した。cf. R. Shafer: "The link between Burmese and Lolo," *Sino-Tibetica*, No. 2, 1938; "Phunoi and Akha tones," *Sino-Tibetica*, No. 4, 1938.

(Pyen) またはピイン (Pyin) 族の言葉として⁷⁾発表されている。ことにブノイ語とピエン語にはもっとも近いが、これらの資料は極めて貧弱であるために、このピス語と比較すること自体は、あまり意味をもたないかも知れない。しかし、ピス・ピエン・ブノイの3言語は極めて密接な関係にある姉妹言語であることは間違いがなく、系統的には、ビルマ語とアカ語のほぼ中間的な段階を占める言語グループであるということが出来る。それ故、このピス語をピス・ピエン・ブノイからなる新グループの代表者として扱うことも許されるであろう。⁸⁾ピス語の系統については、別の一文において論証する。

3. 以下の記述は、バン・ルアの居住者X氏をインフォーマントとして、1965年2月に調査した資料にもとづいている。X氏の経歴については詳細な点はわからないが、バン・ルアとその近辺、それにチェンライ市付近以外には旅行したことがなく、ピス語のほかには、北方タイ語を話し、理解できる。ピス語のインフォーマントとしては好適な一人であった。

この調査は、タイ語を媒介として行なった。ピス人たちは、タイ人との接触がかなり頻繁であるために、質問に用いたタイ語を直訳的に置き換えたりするような影響は、案外に少なかった。

本稿は、ピス語の簡略な記述を目指している予備的な報告である。最終報告は、アカ語、ラフ語、リス語などの研究とともに、1968年までに、本東南アジア研究センターから出版される予定である。

バン・ルア・ピス語の音素体系

つぎに、バン・ルア・ピス語の音素体系を簡略に記述する。

ピス語の一つの形態素は、大部分が1音節である。そして1音節は1種のトネームをともなった CV# または CVC (Cは子音, Vは母音を代表する) の形式をなしている。

4. トネーム

ピス語のトネームは、高型, 中型, 低型の3種類の平板型トーンを基本調とする register tone system をとっている。その基本的な対立関係は、つぎの例からわかる。

[hja:55] <rice field> [ʔaŋ33 ʔu:55] <gut>

7) G. George Scott.; *Gazetteer of Upper Burma and the Shan States*, Pt. 1. Vol. I. Rangoon: 1900. pp. 717~719. "Vocabulary of Pyen (or Pyin) tribe, Kēngtūng, Southern Shan States." (by. G. C. B. Stirling). ここでピエン語語彙 246語が記録されている。これにも声調の記載がないが、ピス語ともっとも近い形式を示している。

8) 私は、この一文において、ピス・ピエン・ブノイの三つの言葉によって代表される、言語間の相違がさほど著しくはない言語グループがあることを提唱したい。そして、このグループに属する言葉がなおいくつか、ラオス・タイ・ビルマ (シャン州) にかけて点々として残っていると推測する。このグループ全体が、同じくラオス・タイ・ビルマに分布する Akha 語のグループと、ビルマ全域に広がっているビルマ語のグループのほぼ中間的な性格をもっていることを論証したいと思う。拙文「ピス語の系統」『東南アジア研究』4巻2号(掲載予定)を参照されたい。また、アカ語については「アカ語の音素体系—タイ国北部における山地民アカ族の言語の記述的研究」*Studia Phonologica* (『音声科学研究』) Vol. IV, 1966. pp.1~37 を見られたい。

[hja ³³]	<fowl>	[hja ³³ ʔu ³³]	<egg>
[hja ¹¹ ŋɛ ¹¹]	<to itch>	[ʔu ²² hlɔŋ ²¹]	<pot>

この事実から、ビス語には、高平型⁵⁵、中平型³³、低平型¹¹の対立を基本とする三つのトネーム類の存在を認めて、それをつぎの記号で表記する。

- 1) 高平型 á 2) 中平型 a 3) 低平型 à

上に例示した形式のトネームは、hjá : hja : hjà, ʔú : ʔu : ʔù のように表記する。

中平型トーンをもつ音節では、母音は喉を緊めて発音する特徴をとともなう（緊喉母音は a, u, ɛ のように表記する）。ちょうどビルマ語で低降型のトーンが、母音を緊喉音にするのと同じ現象である。この3種のトーンは、上に例示した CV 音節のほかにも CVC (nasal) 音節にもあらわれるが、CVC(stop) の音節には高平型と低平型のみが認められて中平型がない。ただし、CVC(stop) 音節では高平型は実際にはやや低い調子 [44] ~ [33] の型をとるけれども、中平型とは、母音の緊喉の有無によって区別される。

[bi ¹¹ khɪt ⁴⁴]	<match>	[ha ³³ mit ²¹]	<bamboo sprout>
[tu ²² kap ⁴⁴]	<a cover>	[tɔk ¹¹ tɔ ²¹]	<house lizard>
[ʔaŋ ³³ jit ⁴⁴]	<few>		

この CVC(stop) のタイプの音節は、タイ語からの借用語に多い。

ビス語の低平型トーン [11] は、低降型トーン [21] と自由に交替することがある。たとえば [muŋ¹¹] と [muŋ²¹] は対立しないし (<sky>), [lan¹¹] と [lan²¹] も対立しない (<earring>)。

この低降型トーンは、大体休止に先行する音節にあらわれるが、休止に先行する音節が付属形態素 -ŋɛ であるときには、さらにその先の音節も低降型をとる場合がまれではない。

[ʔaŋ kɛŋ ²¹]	<hard>	[kɛŋ ²¹ ŋɛ ¹¹]	<to be hard>
[ʔaŋ vɔ ²¹]	<far>	[vɔ ²¹ ŋɛ ¹¹]	<to be far>
[ʔaŋ ^h du ²¹]	<near>	[^h du ²¹ ŋɛ ¹¹]	<to be near>

これらの単語は [kɛŋ¹¹ ŋɛ] [vɔ¹¹ ŋɛ] [^hdu¹¹ ŋɛ] とはならず、必ず低降型で発音される。しかし、[11] と [21] が自由交替型である上に、[11·11] と [21·11] は対立した形態素連続としてあらわれないから、低降型トーンを低平型トーンの変型として扱うことができる。

高平・中平・低平（低降）3種の基本型のほかに、1) わたり声調として、2) タイ語からひとまとまりとして借り入れた単語、数詞と十二支の中に、上昇型トーンが認められる。

1) わたり声調の例としては、[na¹¹ suŋ¹⁵ hɔŋ⁵⁵] <hole of the ear> がある。この上昇型は [na¹¹ suŋ¹¹] <ear> と対比すれば、高平型と連続する低平型からの変調であることがわかる。[11·11] → [11·15·55]

2) 借用語の例としては、数詞の中 [sam³⁵] <three>, [sɔŋ³⁵] <two>, 十二支の中、

[si₃₅] <dragon (cycle of year)>, [sa[•]n₃₅] <monkey (cycle of year)> に上昇型が認められる。これらは、とくに高平型 [55] と対立関係をもたないから、高平型の変形として、そのトネーム類に入れる。

普通の発音と丁寧な発音

前倚的な付属形態素は、丁寧に発音したときは、個有のトーンをとるが、普通に発音すると、いわゆる軽声の現象が観察される。たとえば、<boiled rice> は、丁寧にいうと [haŋ₁₁ tsa₅₅] であるが、普通には [haŋ₁₁ tsa₅] になる。<to be salty> は、丁寧にいうと [jaŋ₅₅ ts'a₅₅] であるが、普通には [jaŋ₅₅ ts'a₅] に、<head> は丁寧にいうと [ʔaŋ₃₃ tu₂₁] であるが、普通は [ʔaŋ₃ tu₂₁] となる。

ビス語の変調現象

このようなトーンの変化は、主要音節+前倚音節とくに /-ŋé/ と連続するとき、もっとも顕著に認められる。

	丁寧な発音	普通の発音	
CV̇#-ŋé	: [ju ₅₅ ŋɛ ₅₅]	: [ju ₅₅ -ŋɛ ₅]	<to take>
CVC (stop)-ŋé	: [^h dep ₄₄ -ŋ ₅₅ -ŋɛ ₅₅]	: [^h dep ₄₄ -ŋ ₅ -ŋɛ ₅]	<to count>
CV#-ŋé	: [ga [•] ₃₃ -ŋɛ ₅₅]	: [ga [•] ₃₃ -ŋɛ ₃]	<to get>
CV̇#-ŋé	: [jɛ ₁₁ -ŋɛ ₅₅]	: [jɛ ₁₁ -ŋɛ ₁]	<to cut>
CV̇#-ŋé	: [ju ₂₁ -ŋɛ ₅₅]	: [ju ₂₁ -ŋɛ ₁]	<to sleep>
CVC (stop)-ŋé	: [k'it ₁₁ -ŋ ₅₅ -ŋɛ ₅₅]	: [k'it ₁₁ -ŋ ₁ -ŋɛ ₁]	<to draw a line>

主要音節+前倚音節 (/lá, lé, lú, khá /etc.)+前倚音節 /ŋé/ の連続では、つぎのような変調現象がある。

[ʔŋ ₅₅ la ₅₅ ŋɛ ₅₅]	→	[ʔŋ ₅₅ la ₄₄ ŋɛ ₃₃]	<to enter>
[haŋ ₅₅ la ₅₅ ŋɛ ₅₅]	→	[haŋ ₅₅ la ₄₄ ŋɛ ₃₃]	<to bring>
[vi [•] ₃₃ lu ₅₅ ŋɛ ₅₅]	→	[vi [•] ₃₃ lu ₃₃ ŋɛ ₃₃]	<to abandon>
[t'a [•] ₃₃ la ₅₅ ŋɛ ₅₅]	→	[t'a [•] ₃₃ laŋ ₃₃ ŋɛ ₃₃]	<to rise up>
[^h duŋ ₁₁ la ₅₅ ŋɛ ₅₅]	→	[^h duŋ ₂₂ la ₂₂ ŋɛ ₂₂]	<to wake up>
[ɕu ₁₁ ʔɛ ₅₅ ŋɛ ₅₅]	→	[ɕu ₂₂ ʔɛ ₂₂ ŋɛ ₂₂]	<to convey>

主要音節と主要音節が連続するときにも、後続する形態素のトーンに影響されて、類似した変調現象が起る。

1) 高平型 [55]+高平型 [55] は [44·55] になる。

<leg>	[pŋ ₅₅ tu ₅₅]	→	[pŋ ₄₄ tu ₅₅]
<nickel>	[p'lu ₅₅ tŋ ₅₅]	→	[p'lu ₄₄ tŋ ₅₅]

2) 中平型 [33]+低平型 [21] は [22·33] になる。

<granary> [kɔ̌33 ts'ɔ̌ŋ21] → [kɔ̌22 ts'ɔ̌ŋ33]

3) 低平型 [11]+高平型 [55] は [22·53] になる。

<saliva> [k'an11 laŋ55] → [k'an22 laŋ53]

<horse saddle> [ʔa11 mɔ̌ŋ11 taŋ55] → [ʔa11 mɔ̌ŋ22 taŋ53]

4) 低平型 [11]+中平型 [33] は [22·33]~[22·11] になる。

<eye> [mɛ:11 hnǔ*33] → [mɛ:22 hnǔ*33]

<grave> [kam11 tǔ*33] → [kam:22 tǔ*33]

5) 低平型 [11]+低平型 [11]~[21] は [22·21] になる。

<garlic> [la:11 p'i:21] → [la:22 p'i:21]

<tongue> [mɛn11 hla:11] → [mɛn22 hla:11]

5. 子音音素

ビス語の子音音素目録は、31種の単純音素と9種の子音結合から成りたっている。

単純音素はつぎのように分類できる。

	stops		affricates		fricatives		nasals		laterals	
velar	k	kh	g ; ʔ :		: h		: ŋ		hŋ	
bilabial	p	ph	b	:		: f	w	: m		hm
dental	t	th	d	: ts	tsh : s		: n	hn	: l	hl
				: tš	tšh : š	j	hj	: ñ		hñ

この目録にあげた単位から成立する子音音素体系は、voiceless : voiced の対立が velar, bilabial, dental の各系列で stop と nasal の両方に並行してあらわれるが、dental affricate の系列では /ts tsh/ に対する dz, /tš tšh/ に対する dž はなく、それと並行して /s š/ に対する z ž も認められないという顕著な特徴をもっている。一方 /l/ に対する /hl/, /j/ に対する /hj/, /w/ に対する /f/ がある。

それ故、ビス語の子音体系の概略の特徴をいうと、stop : nasal : affricate : fricative : lateral の対立, unaspirated : aspirated の対立, voiceless : voiced の対立の三つが中心をなしていると考えられる。この対立関係は、専ら音節 CVC の C- の位置にあらわれて、末尾の -C の位置では、この中、stop : nasal : fricative (実際には friction はあらわれない) の対立、すなわち /-k, -t, -p/ : /-ŋ, -n, -m/ : /-j, -w/ の対立のみが機能をもつことになる。

つぎに各音素に該当する音声の性格について述べたい。

1) 無声無気閉鎖音 /k/ /t/ /p/

/k/ /t/ /p/ は音節初頭の位置では [k] [t] [p] であり、完全な閉鎖と破裂をもつが、末尾の位置では完全に閉鎖はするが、破裂はしない。[k⁰] [t⁰] [p⁰] である。

[ku:11 ηε55] <to sew>	: [ne33 ʔɻk044] <breast>
[tɔ:55 lɔ:33] <butterfly>	: [lɔŋ11 pε•t044] <breast of woman>
[pa:11 pa:33] <cheek>	: [k'ε•p044] <shoe>

無声無気の閉鎖音は、なお声門にもあらわれる。/ʔ/ は極めて弱い破裂しかもたない [ʔ] であり、音節が中平型トーンをもって緊喉母音で発音されるときには、とくにはっきりと観察される。そして、中平型以外のトーンをもつ音節でも、初頭に /ʔ/ があるときには、その母音が緊められて発音される傾向にある。

[ʔaŋ33 tu:21] <head>	[ʔuŋ55 ηε:55] <to cry>
[ʔu:55 ηε:55] <to laugh>	[ʔεŋ11] <excrement>

2) 無声出気閉鎖音 /kh/ /th/ /ph/

/kh/ /th/ /ph/ は、完全な閉鎖と度合の強くない破裂をもつ [k'] [t'] [p'] である。この音素は末尾の位置にはあらわれない。

[k'uŋ55] <thread>	[t'εŋ33] <that>
[p'a:33 tɕaũ55] <Buddha>	

3) 有声無気閉鎖音 /g/ /d/ /b/

/g/ /d/ /b/ は、完全な閉鎖と破裂をもつ [g] [d] [b] である場合と、入りわたりが弱い無声鼻音である [ɰg] [ɰd] [ɰb] である場合の両方がある。そして他の形態素ととじたつながり関係をもつとき、あるいは休止につづく位置でも丁寧に発音される場合には、[g] [d] [b] が観察される。

[gɻ:33]~[ɰgɻ:33] <I>	[ʔaŋ gaũ21] <bone>
[duŋ55 ηε:55]~[ɰduŋ55 ηε:55] <to sit>	[bi:11 su:11]~[ɰbi:11 su:11] <Bisu>
[laŋ55 bε:21 ηε11] <to be thirsty>	

それ故 [g] : [ɰg], [d] : [ɰd], [b] : [ɰb] は、意味の対立をになわない自由交替単位であると認められる。

4) 無声無気破擦音 /ts, tsh, tš, tšh/

硬口蓋歯茎音 [ts] [ts'] および歯茎硬口蓋で調音される [tɕ] [tɕ'] が、たとえばつぎの例で観察される。

[tsɔ:11 mε:21] <salt>	[ʔaŋ33 tɕɔ:21] <waist>
[ts'aũ11 ηε:55] <to cough>	[ʔaŋ33 tɕ'aũ55] <sweet>

前者には音素 /ts/ /tsh/ を、後者には /tš/ /tšh/ をたてる。この2系列の対立は明瞭であるが、この中 [tɕ-] は [kj-] と自由に交替することがある。

[tɕu:11 ηε55]~[kju:11 ηε55] <to suck>	[tɕi:11 ηε55]~[kji:11 ηε55] <to speak>
[ʔaŋ33 tɕɔ:21]~[ʔaŋ33 kjo:21] <waist>	

私のインホーマントは、[kj-]の方をより好んで選んだが、専ら[kj-]のみで[tɕ-]の形があらわれない形態素があり（たとえば[kja₁₁-ŋɛ₅₅] <to hear>）、その反対に[tɕ-]のみで[kj-]は聞かれない形態素もある（たとえば[tɕan₃₃ bɛn₃₃] <dish>）。したがって、[tɕ]と[kj]はまったくの自由交替形ではないことがわかり、その上、[tɕ] [kj]にあたる出気音[tɕ'] [k'j]は、はっきりと対立する単位であるから、前者[kj]にはあとで述べる子音音素結合 /kj/ をたてて、音素 /tʃ/ とは対立する単位と認めたい。

/tʃ-/	/kj-/	/tʃh-/	/khj-/
[tɕ] (一部で [kj] と自由交替)	[kj]	[tɕ']	[k'j]

5) 摩擦音 /s/ /ʃ/ /h/ /j/ /hj/ /f/ /w/

摩擦音の系列には i) 硬口蓋歯茎で調音される無声音 [s], ii) 歯茎硬口蓋音無声 [ɕ], iii) 声門音無声 [h], iv) 弱いわたり音有声 [j] および無声 [ʃj], v) 唇歯音無声 [f] 有声 [v], vi) 両唇音 [w] が観察され、それに該当する音素をつぎのようにたてる。

[s]	[ɕ]	[h]	[j]	[ʃj]	[f]	[v]	[w]
/s/	/ʃ/	/h/	/j/	/hj/	/f/	/w/	
[sɔ ₁₁ p'jɛ ₂₁] <tooth>				[sa ₁₁ tɰ ₃₃] <priest>			
[ɕa ₅₅ ŋɛ ₅₅] <to seek>				[ʔaŋ ₃₃ ɕum ₅₅] <shade>			
[ha ₃₃ ja ₂₁] <bird>				[haŋ ₅₅ man ₅₅] <wind>			
[jja ₃₃] <hen>				[jjaŋ ₅₅ ba ₃₃] <elephant>			
[kaũ ₅₅ fei ₅₅] <coffee>				[maĩ ₂₁ si ₃₃ fan ₂₁] <teeth brush>			

この [f] はもっぱらタイ語からの借用語のみにあらわれて、私の資料ではこの二つの単語に限られる。

[wa ₂₁] <pig>	[ʔa ₁₁ wam ₅₅] <bear>
[vɣ ₃₃] <chisel>	[ʔaŋ ₃₃ vɛ ₃₃] <flower>
[vuũ ₅₅ ŋɛ ₃₃] <to buy>	[vi ₃₃ lur ₃₃ ŋɛ ₃₃] <to abandon>

この [w] と [v] の分布は補い合っていて、[a] 母音の前では [w] が観察されるが、そのほかの母音の前では [v] である。これには音素 /w/ をたてた。ただ、タイ語からの借用語としてははっきり意識されている単語には、[pjaŋ₅₅ wi₃₃] <fan>, [wɛn₃₃] <mirror> のように [w] があらわれる場合もある。

6) 鼻音 /ŋ/ /m/ /n/ /ñ/ : /hŋ/ /hm/ /hn/ /hñ/

鼻音の系列には [ŋ] [m] [n] [ɲ] の有声音のほか、入りわたりが無声音である [ʰŋ] [ʰm] [ʰn] [ʰɲ] が観察される。前者を /ŋ/ /m/ /n/ /ñ/ とし、後者を /hŋ/ /hm/ /hn/ /hñ/ とする。この対立には、つぎの例がある。

/ŋ/	[ŋoĩ ₂₁ ŋɛ ₁₁] <to be bent>	:	/hŋ/[ʰŋeĩ ₂₁] <leech>
-----	--	---	-----------------------------------

/m/	[mun ₂₁]	<sky>	:	/hm/	[^h mun ₅₅]	<mushroom>
/n/	[na ₁₁ swuŋ ₁₁]	<ear>	:	/hn/	[^h na ₅₅ khaŋ ₅₅]	<nose>
/ñ/	[^h ɔm ₁₁ ŋɛ ₁₁]	<to dye>	:	/hñ/	[ʔaŋ ₃₃ ^h ɔum ₅₅]	<short>

7) 側面音 /l/ /hl/

有声歯茎側面音 [l] と入りわたりが無声音である [l̥] の2種が観察される。

[lum ₅₅ ŋɛ ₅₅]	<to be warm>	:	[l̥lum ₅₅ ŋɛ ₅₅]	<to warm>
[lan ₅₅]	<axe>	:	[ʔaŋ ₃₃ l̥lan ₅₅]	<grandson>

この2音素の対立を /l/ : /hl/ で表記する。

8) 音素結合

ビス語の子音音素結合には、無摩擦わたり音 [j] をともなう [pj] [p'j] [bj] [^hmj] [kj] [k'j] と、有声側面音 [l] と結合する [pl] [p'l] [bl] [kl] [k'l] が認められて、それ以外の結合タイプはない。そして、主核子音となるのは、両唇音および軟口蓋音に限られる。[j] をともなう結合では、主核の閉鎖音・鼻音は、やや口蓋音化される。とくに [kj] [k'j] はかなりの程度に口蓋音化される。閉鎖音と結合する [l] は一般に持続が短かく、無声音化する傾向が強い。[kl]→[k^hl] [k'l]→[k'^hl] [bl]→[b^hl]

[pja ₂₁]	<bee>	:	[p ^h um ₁₁]	<taro>
[sɔ ₁₁ p'jɛ ₂₁]	<tooth>	:	[p' ^h a ₃₃]	<priest>
[ʔaŋ ₃₃ bja ₂₁]	<many>	:	[bla ₁₁]	<arrow>
[^h mja ₃₃ t'aŋ ₅₅]	<knife>	:		
[kja ^h ₁₁ ŋɛ ₅₅]	<to wash (cloth, hair)>	:	[ʔaŋ ₃₃ k ^h am ₁₁]	<slow>
[ʔaŋ ₃₃ k'ja ^h ₅₅]	<horn>	:	[ʔaŋ ₃₃ k' ^h a ^h ₅₅]	<inside>

これには、つぎの諸音素結合をたてる。

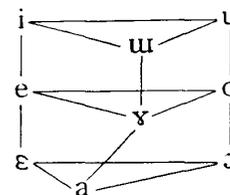
/pj, phj, bj, hmj : kj, khj/ /pl, phl, bl : kl, khl/

ただし、/phj/ の頻度数は、極めて少ない。

6. 母音音素

ビス語の母音音素の目録は、前舌張唇母音4種 /i e ε a/, 後舌円唇母音3種 /u o ɔ/, および後舌張唇母音2種 /ɯ ɣ/ からなり、全体がととのった9母音システムをつくっている。ビス語にはつぎの例のごとく [i] [u] [ɯ] [eɪ] [ɯo] [ɣ] [ε] [ɔ] [a] の対立が観察される。

[pi ₁₁ ŋɛ ₁₁]	<to give>	:	[ne ₃₃ li ₅₅ ka ₁₁]	<clock>	/i/
[peɪ ₁₁ ŋɛ ₁₁]	<to show>	:	[leɪ ₁₁ ja ₂₁]	<ogre>	/e/



[pɛɪ ₁₁ k'aɪ ₂₁]	<kidney>	:	[lɛɪ ₅₅ ɲɛɪ ₅₅]	<to go>	/ɛ/
[paɪ ₁₁ paɪ ₃₃]	<cheek>	:	[laɪ ₅₅ ɲɛɪ ₅₅]	<to come>	/a/
[puɪ ₅₅ laɪ ₅₅ ɲɛɪ ₅₅]	<to think>	:	[luɪ ₅₅ ɲɛɪ ₅₅]	<to come>	/u/
[pɣɪ ₃₃ ɲɛɪ ₅₅]	<to shoot>	:	[lɣɪ ₃₃]	<saw>	/ɣ/
[laɪ ₁₁ puɪ ₂₁]	<hand>	:	[phluɪ ₅₅]	<money>	/u/
[nɛm ₃₃ pũo ₃₃]	<bucket>	:	[lũo ₃₃]	<shovel>	/o/
[pɔɪ ₁₁ ɲɛɪ ₁₁]	<to cure>	:	[loɪ ₅₅]	<wheel>	/ɔ/

このほか、第一音節の位置で中平型トーンをとり母音に終る音節と、[p] または [m] の前にたつとといった限定された環境で、[ɛ] があらわれる。

[nɛɪ ₃₃ ɲɣɪ ₃₃]	<tomorrow>		[tuɪ ₁₁ kɛp ⁰ ₄₄]	<a cover>
[tɛɪ ₃₃ sɛɪ ₅₅]	<mountain>		[t'ɛm ₃₃]	<cavern>
[kɛɪ ₃₃ kjuɪ ₂₁]	<valley>			

この [ɛ] はこの環境における [a] の変形と考え得るから、これらの母音に /i, e, ɛ, a, u, ɣ, u, o, ɔ/ の9音素をたてる。

/e/ および /o/ 音素は、CVC 音節においても、たとえば [-eɪn], [-ũon] の形であらわれる。

[hɔŋ ₃₃ tɕũon ₅₅]	<fox>		[k'jeɪn ₅₅ ɲɛɪ ₅₅]	<to be sour>
[ʔaŋ ₃₃ pũon ₂₁]	<white>		[ʔaŋ ₃₃ seɪŋ ₅₅]	<voice>

長母音と短母音の職能的な対立は全体として認められない。ただ閉鎖音 [-p⁰] [-t⁰] [-k⁰] に終る音節では母音が長くなる傾向にあり、鼻音に終る音節の母音はそれに比べて短い。母音に終る音節 CV# では、高平型、低平型のトネームをとる場合は長母音があられるが、中平型をとる場合には、母音は緊喉音になって、持続がやや短い。つぎの例がある。

[laɪ ₅₅ ɲɛɪ ₅₅]	<to come>	CV# (高平型)
[lɛɪ ₃₃ tuɪ ₂₁]	<rope>	CV# (中平型)
[laŋ ₅₅]	<water>	CVC (nasal)
[kɛɪ ₃₃ la't ⁰ ₄₄]	<paper>	CVC (stop)

つぎの降り型二重母音が観察される。

[aĩ]	:	[ɕaĩ ₁₁ ɲɛɪ ₁₁]	<to bend>	;	[ɔĩ]	:	[ʔaŋ ɲɔĩ ₂₁]	<curved>
[ɣĩ]	:	[mɣĩ ₅₅]	<fog>	;				
[aũ]	:	[ʔaŋ ₃₃ gaũ ₂₁]	<bone>	;	[eũ]	:	[keũ ₃₃]	<glass>
[ɛũ]	:	[ʔaŋ ₃₃ t'ɛũ ₂₁]	<a row>	;	[ɔũ]	:	[ʔaŋ k'jɔũ ₃₃]	<green>

この副次音 [ĩ] [ũ] を、音節末尾にあられる子音音素 /j/ /w/ に該当する単位と考え、/aj/ /ɔj/ /ɣj/ /aw/ /ew/ /ɛw/ /ɔw/ の連続をたてることが許される。しかし、この

二重母音は初頭音と自由な連続関係をもたないで、たとえば [eu] は [k] とのみ、[ɛu] は [t'] とのみ連続するというように分配が限定されているから、/ew/ /ɛw/ を対立した結合として扱うよりも、/ɛw/ で統一することにする。これらの結合があらわれる単語は、タイ語からの借用語であることが多い。

ビス語の母音音素と末尾子音の連続関係は、私の資料からは、つぎのようになる。

	-ŋ	-m	-n	-k	-p	-t	-j	-w
a	aŋ	am	an	ak	ap	at	aj	aw
i	iŋ	×	in	ik	×	it	×	×
e	eŋ	em	en	ek	×	et	×	×
ɛ	ɛŋ	ɛm	ɛn	×	ɛp	ɛt	×	ɛw
u	uŋ	×	un	×	×	ut	×	×
ɤ	ɤŋ	ɤm	ɤn	ɤk	ɤp	ɤt	ɤj	×
u	uŋ	um	un	uk	up	ut	×	×
o	oŋ	×	on	ok	op	ot	×	×
ɔ	ɔŋ	ɔm	ɔn	ɔk	×	ɔt	ɔj	ɔw

7. つなぎ音素 /ŋ/

ビス語では、核になる形態素が、付属形態素 -/ŋɛ/ と <とじたつながり関係> にあるとき、この2つの形態素の間に <つなぎ音素> /ŋ/ があらわれることがある。たとえば /dap/ と /ŋɛ/ の連続では [ʰdep⁴⁴ ŋ⁵⁵ ŋɛ⁵⁵] <to count> となる。この現象は、核になる形態素の音素形式と関係なくおこるが、閉鎖音に終る形式と中平型トーンをとる形式で、より頻繁に認められる。

/pɤk/ + /ŋɛ/ : [pɤk⁴⁴ ŋ⁵⁵ ŋɛ⁵⁵] <to jump>

/tit/ + /ŋɛ/ : [tit⁴⁴ ŋ⁵⁵ ŋɛ⁵⁵] <to fix>

/phɔŋ/ + /ŋɛ/ : [pʰɔŋ³³ ŋ⁵⁵ ŋɛ⁵⁵] <to open>

/tshan/ + /ŋɛ/ : [tsʰaŋ³³ ŋ⁵⁵ ŋɛ⁵⁵] <to throw>

核になる形態素の音素形式が CV# であれば、つなぎとしてあらわれる音素 /ŋ/ がその形式と結合して、CVŋ の形になることがある。

/lá/ + /ŋɛ/ : [la⁵⁵ ŋɛ] ~ [laŋ⁵⁵ ŋɛ], /lé/ + /ŋɛ/ : [le⁵⁵ ŋɛ] ~ [leŋ⁵⁵ ŋɛ]

/ʔɛ/ + /ŋɛ/ : [ʔɛ⁵⁵ ŋɛ] ~ [ʔɛŋ⁵⁵ ŋɛ], /luú/ + /ŋɛ/ : [lu⁵⁵ ŋɛ] ~ [luŋ⁵⁵ ŋɛ]

このように CV# タイプと CVŋ タイプの2形式は、自由変形であるが、形態素 {lá} {lé} などは /lá/ と /láŋ/, /lé/ と /léŋ/ のごとくそれぞれ2つの異形態から成るということもできる。そして普通の発話では、後者の形式の方がより多く使われている。

ビス語の文法体系

私は現在、ビス語の文法体系を十分に記述できるほどの資料をもたないが、ここでその概略のみを述べてみたい。

8. ビス語の単純単語は、一つまたは二つあるいはそれ以上の形態素の結合から出来ている。二つ以上の形態素からなる単純単語は、その中の一つが ʔaŋ- または $-\eta\epsilon$ の付属形態素である場合がもっとも多い。

$/\text{ʔaŋ-khji}/$ <debt>	$/\text{khji-}\eta\epsilon/$ <to lend>
$/\text{ʔaŋ-hjà}/$ <itch>	$/\text{hjà-}\eta\epsilon/$ <to itch>
$/\text{ʔaŋ-dò}/$ <soft>	$/\text{dò-}\eta\epsilon/$ <to be soft>

この例から明らかなごとく、同一の形態素に ʔaŋ- がつけば名辞表現 (noun expression) になり、 $-\eta\epsilon$ がつけられると動辞表現 (verb expression) になる。この手順がビス語の単語構成に見られる基本的な特徴である。そして、 ʔaŋ- または $-\eta\epsilon$ をともなわないで、二つ以上の形態素の連続による単語構成もおこり得る。

tù tshòŋ <帽子> ← ʔaŋ-tù <頭> と $\text{tshòŋ-}\eta\epsilon$ <入れる>
khú tshòŋ <ズボン> ← là-khù <足> と $\text{tshòŋ-}\eta\epsilon$ <入れる>
mà plàw phà <しゅろの葉> ← mà-plàw <しゅろ> と ʔaŋ-phà <葉>

これらの左側にあげた形態素連続はやはり1単語として扱わなければならない。そこで、この ʔaŋ- の存在は単語の切れ目を示す単位として考えることができる。たとえば、<果物> $/\text{tsùŋ-tsuŋ sù}/$ は3形態素の連続からなる1単語であるが、<木の实> tsùŋ-tsuŋ ʔaŋ-sù は、2形態素からなる二つの単語の連続である。<卵> hja-ʔu は2形態素から成る1単語であるが、<刃> hmja ʔaŋ-sò は1形態素の単語と2形態素から成る単語の連続であり、<刀の柄> hmja ʔaŋ-phù も同様に2単語の連続として扱わねばならない。

9. ビス語の文は大別すると、等式文 (equational type) と敘述文 (narrative type) に分け得る。この2つの文のタイプは、それぞれ特有の否定形式をもつほかに、つぎの点で区別される。等式文は、2つの名辞構文から成りたち、丁寧な発話では、その2つの名辞構文の間に休止がおかれる。敘述文は、形態素 $-\eta\epsilon$ に終るかあるいはその位置に入れ替り得る付属形態素に終る動辞表現と、それに先行する名辞表現から成りたつ。これも丁寧な発話では、名辞表現と動辞表現の間に休止がおかれる (# で休止を示す)。

等式文

ga \# 名辞表現 # <私は……である>	ga \# bì-sù <私はビス人である>
ga \# 名辞表現 ma-ʔa \# <私は……ではない>	ga \# bì-sù ma-ʔa <私はビス人ではない>

敘述文

ga # 動辞表現 (-ŋɛ) # <私は……する> ga # ʔé-ŋɛ <私は(南へ)行く>
 ga # ma- 動辞表現 # <私は……しない> ga # ma-ʔé <私は(南へ)行かない>

まず等式文の名辞表現の環境に入り得る形態を group S の形態素, 敘述文の動辞表現の環境に入り得る形態素を group V の形態素とよぶことにする。そして ga の位置に替り得る形態素も group S, ma- に替り得る形態素はこのほかに見出せないが, -ŋɛ に替り得る形態素はいくつかあって, ma-, -ŋɛ と, それらと, さらにつぎに述べる別の 1 類をまとめて, group E とする。ビス語の形態素は, この 3 類 group S, group V, group E に大別できる。

10. ビス語では, 主格 <……は>, 対格 <……を> の関係は, 普通は特定の形態素で表現されない。専ら語順のみがその関係を表現する職能をになっている。

ga tɔ-lɔ wap-ŋɛ <私(は)蝴蝶(を)つかむ>
 ga tshán lə-khàw thu-ŋɛ <私(は)盗人(を)つかまえる>

これに対して, <……で>, <……に>, <……から>, <……と>, <……より> (比較) は, 特定の形態素で表現される。つまり敘述文はつぎのように拡張される。

- | | | | | |
|------|----|------------|------|---------------|
| i) | ga | S-na | V-ŋɛ | 私は………に………する |
| ii) | ga | S-kónj | V-ŋɛ | 私は………から………する |
| iii) | ga | S-tšàj | V-ŋɛ | 私は………から………する |
| iv) | ga | S-ne | V-ŋɛ | 私は………と………する |
| v) | ga | S-ʔɣ | V-ŋɛ | 私は………で………する |
| vi) | ga | S-lò-bà-pá | V-ŋɛ | 私は………より………である |
-
- | | | | | |
|------|----|---------------|---------------|----------------------|
| i) | ga | naŋ-na | niŋ pì-ŋɛ | <私(は)あなたにこれ(を)あげます> |
| ii) | ga | naŋ-kónj | niŋ kjì-ŋɛ | <私(は)あなたからこれ(を)借ります> |
| iii) | ga | tšàŋ-hàj-tšàj | lú-ŋɛ | <私(は)チェン・ライから来ました> |
| iv) | ga | naŋ-ne | ʔé-ŋɛ | <私(は)あなたと行きます> |
| v) | ga | nu-ʔɣ | dúŋ-ŋɛ | <私(は)ここに坐ります> |
| vi) | ga | naŋ-lò | bà pá hmón-ŋɛ | <私(は)あなたより(背が)高い> |

なお, この -na はつぎの場合にも使われる。

ga naŋ-na khe-ŋɛ <私(は)あなたを恐れる>
 ga naŋ-na mʻ-ŋɛ <私(は)あなたをきらう>

主体と, 主体が恐れたり, きらったりする対象との関係は, 日本語では <を> であらわされるが, ビス語は <に> で表現する。

この -na などの 付属形態素をまとめるとつぎのようになる。

与格 na : 従格 kɔŋ (人物), tʂaj (場所) : 連格 ne : 於格 ʔv

これらの形態素はすべて、さきに掲げた ma-, -ŋe と同じく group E に属させる。

<私はチェン・ライに行く> ga tʂaŋ-hàj ʔé-ŋe

<私は椅子に坐る> ga tàŋ-ʔi dúŋ-ŋe

の日本語の <に> にあたる関係もビス語では特定の形態素によって表現されない。

11. Group S の形態素の中, ga と直接交替する関係にある人称代名詞類は, つぎの体系をもっている。単数形・複数形のほかに, <私たち二人>, <あなた方二人> の双数の形がある。

1sg.	ga	pl.	gu	du.	gaj
2sg.	na~naŋ	pl.	nɔŋ	du.	naj
3sg.	ja~jaŋ	pl.	jɔŋ	du.	×

単数形式には, 2人称と3人称に Ca 形式と Caŋ 形式の2つの自由交替形式があるが, 1人称には, Ca に対する Caŋ はない。2人称と3人称は単数形 Caŋ, 複数形 Cɔŋ のごとく母音の対立を示しており, 双数形は1人称と2人称が, 単数形 Ca に対して, Caj の形をもっている。つぎに, /ga ʔé-ŋe/ <私(は)行きます> は, /ga-lán ʔé-ŋe/ <私自身行きます> に替り得る。この ga-lán <私自身> に対立する2人称, 3人称は, つぎの形式である。

1. ga-lán (ʔé-ŋe) 2. naŋ-lán (ʔé-ŋe) 3. jaŋ-lán (ʔé-ŋe)

等式文の基本型 jaŋ # tʂaŋ ʔaŋ-hmèn <彼(は)よい人間である> は, 敘述文にかえると, jaŋ # hmèn-ŋe <彼はよい> になる。これはさらに, jaŋ-hú # hmèn-ŋe <彼のものはよい> になり得る。この jaŋ-hú に対立する形式はつぎのごとくである。

ga-hú hmèn-ŋe <私のものはよい>

naŋ-hú hmèn-ŋe <あなたのものはよい>

jaŋ-hú hmèn-ŋe <彼のものはよい>

jaŋ # tʂaŋ ʔaŋ-hmèn

jaŋ # hmèn-ŋe

jaŋ-hú # hmèn-ŋe

等式文 niŋ # náŋ-sú ʔaŋ-hmèn <これはよい書物である> を敘述文にすると, ni-náŋ-sú # hmèn-ŋe <この書物はよい> になる。この niŋ に対立する指示詞は, つぎの体系をなしている。

ni~niŋ 近称, the~theŋ 遠称, he~heŋ 最遠称, hjo 最遠遠称, hòk hjo 最遠遠遠称

近称, 遠称, 最遠称にあらわれる CV# と CVŋ の両形式は自由交替形であるが, he 以下の形態素は, どの点で区別されているのか, あるいははっきりとした区切りがあるのかどうかは詳かではない。

niŋ # náŋ-sú <これは書物です> に ni-ma # náŋ-sú <このものは書物です> が替り得

る。この ni-ma に対立するそのほかの指示詞の形式は、つぎのごとくである。

ni → ni-ma ; the → the-ma <そのもの> ; he → he-ma <あのもの> ;

hjo → hjo-ma <向うにあるもの> ; hək-hjo → hək-hjo-ma <ずっと向うにあるもの>

それらの指示詞は、上に掲げた於格をあらわす形態素-ʔvの前にも入り得る。たとえば

ga nu-ʔv dúŋ-ŋe <私はここに坐る>

ga the-ʔv dúŋ-ŋe <私はそこに坐る>

ga he-ʔv dúŋ-ŋe <私はあちに坐る>

ga hjo-ʔv dúŋ-ŋe <私は向うに坐る>

ga hək-hjo-ʔv dúŋ-ŋe <私はずっと向うに坐る>

この中で、近称指示詞の形式のみがさきの形と一致しないことがわかる。

ここで <これ> ni の異形態について述べる必要がある。ni の自由交替形として nin があることはさきあげたが、そのほかに nu- および ne- があって、つぎの分布を示している。

/nu-ʔv/ <ここ> {nu-} /ne-hla/ <今月> {ne-}

<それ> the, <あれ> he が、-ʔv の前の環境でもそれ以外の環境と同じ音素形式をもってゐるから、この {nu-} および {ne-} を、{ni~nin} の異形態として扱うことにする。近称指示詞 <これ> は {ni~nin} の自由交替形と {nu-, ne-} の3つの異形態から成りたっている。

人物、事物、時間、場所、数の発問は、つぎの形であらわされる。

[人物] ʔa-sàŋ-ʔv <だれ> [事物] ma-tšv-ʔv <何>

[時間] ʔa-lò hmui-ʔv <いつ> [場所] kvŋ-ʔv <どこ>

[数] ʔa-lò-ʔv <いくら>

これらはいずれも -ʔv をともなっているが、これは上に述べた於格の -ʔv と同一形態素であると考えられる。つまりピス語では、代表的な発問詞はすべて於格で表現されていることになる。

<誰が来るか> ʔa-sàŋ-ʔv lá-ŋe は直訳すると <誰において来るか> であり、<何を食べるか> ma-tšv-ʔv tsà-ŋe は <何において食べるか> となる。<いくらもつか> ʔa-lò-ʔv tša-ŋe も <いくらにおいてもつか> の意味である。

12. 11. で述べた人称代名詞、指示詞、発問詞のほか、Group S としてまとめ得る単語は、形式の上から、つぎの7類に分けることができる。

1) Prefix をもたない形式, 2) Prefix ʔaŋ- をともなう形式, 3) Prefix ʔa- をともなう形式, 4) Prefix jì- をともなう形式, 5) Prefix ka- をともなう形式, 6) Prefix ʔù- をともなう形式, 7) Suffix -ba をともなう形式

つぎに各形式について説明を加える。

1) Prefix をもたない単純単語

i) 1 形態素から成る単語 lán <水>, khún <糸>

ii) 2形態素から成る単語 *mé-hnuu* <目>, *hná-kháŋ* <鼻>

iii) 3形態素から成る単語 *là-tshùr-tonj* <ひじ>, *là-m-tòŋ-hné* <とんぼ>

タイ語からの借用語には、3音節の単語が多いが、ビス語ではそれらをいずれも3形態素から成る単語として扱うことはできない。

màj si fàn <歯刷子>, *na lí kà* <時計>

2) Prefix *ʔaŋ-* をともなう形式, Prefix *ʔaŋ-* は <事物の名前あるいは事柄> を示す。

ʔaŋ-hónj <部屋> *ʔaŋ-thà* <床> *ʔaŋ-phà* <葉> *ʔaŋ-kho* <木の皮>

ʔaŋ- をともなう単語の大半は、等式文 *ni-ma # …… <このものは……である> の……の環境* に入り得る。ところが *ʔaŋ-* をもつ単語の中で、この位置にたち得ないものがある。たとえば、**ni-ma ʔaŋ-tha*, **ni-ma ʔaŋ-thú*, **ni-ma ʔaŋ-hùr*, **ni-ma ʔaŋ-lá*。これらは本来 *-ŋe* をともなう group V の単語, *tha-ŋe* <鋭い>, *thú-ŋe* <厚い>, *hùr-ŋe* <大きい>, *lá-ŋe* <来る> から, *ʔaŋ-* をつけて group S に移項した単語である。本来の group S の単語と group V から *ʔaŋ-* をともなって移項した単語はこの点で異っている。そして、後者の単語は、叙述文の *ga* の位置では、前者の単語と同じ機能をもっている。

ni-ma # hùr-ŋe これは大きい *ni-ma # thú-ŋe* これは厚い

ʔaŋ-hùr # hmèn-ŋe 大きいのはよい *ʔaŋ-thú # hmèn-ŋe* 厚いのはよい

ʔaŋ-hónj # hmèn-ŋe 部屋がよい *ʔaŋ-thà # hmèn-ŋe* 床がよい

3) Prefix *ʔa-* をともなう形式 この形式は、親属名詞の一部と動物の名前をあらわす単語の一部にあらわれる。

ʔa-hù 祖父 *ʔa-phì* 祖母 *ʔa-tsi* 姉 *ʔa-pò* 妹

ʔa-ʔáj 兄 *ʔa-phé* 弟 *ʔa-mɛŋ* 猫 *ʔa-hmjàn* 牛

ʔa-mòŋ 馬 *ʔa-kàw* 家鴨

4) Prefix *jì-* をともなう形式 この形式をもつ単語は2つしか記録していない。いずれも液体に関するものである。

jì-tshùr <くしゃみ> → *ga jì-tshùr tshùr-ŋe* <私はくしゃみをする>

jì-šì <尿> → *ga jì-šì šám-ŋe* <私は放尿する>

5) Prefix *ka-* をともなう形式 この形式をもつ単語には、北方タイ語からの借用語が多い。

ka-tàj <うさぎ> <N. Thai *kà-tàaj*, *ka-pàw* <袋> <N. Thai *kà-pǎw*, *ka-pòŋ*

<鐘> <N. Thai *kà-pòŋ*, *ka-sýj* <猿> N.Thai? *ka-kjù* <谷> N. Thai?

6) Prefix *ʔù-* をともなう形式 この形式の単語はつぎの3語しか記録していないが、*ʔù-* はまるい形をもつ事物を示す形態素と考えられる。

ʔù-hla <月> *ʔù-kùr* <星> *ʔù-hlòŋ* <つぼ>

ʔù-hla が他の形態素に限定されて、別の単語を構成するときには、この Prefix *ʔù-* はあら

われない。 ?ù-hla → t̀-̀hla <来月>, ne-hla <今月>

7) Suffix -ba をともなう形式 Suffix -ba にはつぎの三つの種類が考えられ, -ba₁, -ba₂, -ba₃ の三つの形態素をたて得る。

i) -ba₁ <大きい> の意味をもつ。

là-ba <親指> tsán-ba <驚>

ii) -ba₂ <女性> をあらわす。

khà-ba <妻> ?ù-ba <伯母>

iii) -ba₃ とくにはっきりとした意味がわからない。

nuŋ-ba <心>, khòŋ-ba <村>, k'éŋ-ba <道> lə-ba <石>, pòŋ-ba <腹>

13. Group S の単語の中で, はっきりとした体系をもつものに数詞がある。ピス語の数詞は, すべて北方タイ語からの借用語である。

1 nùŋ 2 sǒŋ 3 sám 4 sì 5 hà 6 hók 7 kjit 8 pèt
9 káw 10 síp 11 síp-?ét 20 sáw 21 sáw-?ét 100 lój 1000 phan

<一> にはタイ語と同じく nùŋ と -?ét の 2 形態素が認められるが, そのほかにつぎの環境で nùŋ, ?ét に替って, t̀ が用いられる。

<人一人> tshán t̀ màn, <一カ月> t̀ hla, <一年> t̀ pi, <半分> t̀ khuŋ, したがって, <一> には 3 つの形態素が補い合う環境で使われていることになる。これと並行して, <二> は sǒŋ のほかに, nì hla <二カ月>, nì hnuŋ <二日> では nì が用いられるから, これも sǒŋ と nì の 2 形態素が補い合っていることになる。

数詞のあとにつづく範疇詞は, 人間に関する man (上掲の <人一人> と ja-kha t̀ màn <友達一人> の例に見られる) のほかは記録できなかったが, かなりの種類があることは期待できる。

14. 叙述文を構成する動辭表現の基本型は, group V-ŋe であった。この group V-ŋe に替り得る形式には, つぎの 2) 以下 13) がある。

1) 基本型 V-ŋe : その否定形式は上掲のごとく ma-V である。

ga # kjà-ŋe <私は聞く> ga # ma kjà <私は聞かない>

ga # ?é-ŋe <私は行く> ga # ma ?é <私は行かない>

2) V-ga-ŋe : 基本型 V-ŋe に対して可能を示す形式である。その否定形は ma-V-ga となる。

ga # ?é-ŋe <私は行く> → ga # ?é-ga-ŋe <私は行ける>

ga # ma-?é <私は行かない> → ga # ma-?é-ga <私は行けない>

3) V-tša-ŋe : 基本型 V-ŋe に対して進行態を示す形式である。この否定形式はない。

ga # bì-sù tàn kji-ŋe <私はピス語を話す> → ga # bì-sù tàn kji-tša-ŋe

<私はピス語を話している>

この tša-ŋɛ は <もつ>, <ある> の意味の形態素であるから, タイ語の進行態を示す -jù (もともとは <ある> の意) からの類推で作られた可能性が強い。

4) V-ka-ŋɛ : 基本型 V-ŋɛ に対して, その相互形を示す形式, <互に……する>

ga # kji-ŋɛ <私は話す> → gaj # kji-ka-ŋɛ <私たち2人は互に話をする>

gaj # si-tvŋ-ka-ŋɛ <わたしたち2人が(互に)けんかをする>

この形式はタイ語の -kan からの借用形であると考えられる。

5) V-là : 基本型 V-ŋɛ に対して発問を示す形式

naŋ # ?é-ŋɛ <あなたは行く> → naŋ # ?é-là <あなたは行くか>

naŋ # tsà-ŋɛ <あなたは食べる> → naŋ # tsà-là <あなたは食べるか>

6) V-tshí : 基本型 V-ŋɛ に対する使役態を示す形式

naŋ # ?é-ŋɛ <あなたは行く> → naŋ # ?é-tshí <あなたが行かせる>

naŋ # kjà-ŋɛ <あなたが聞く> → naŋ # kjà-tshí <あなたが聞かせる>

7) V-si-khà : 基本型 V-ŋɛ に対して希求を示す形式

ga # ?é-ŋɛ <私は行く> → ga # ?é-si-khà <私は行きたい>

ga # tsà-ŋɛ <私は食べる> → ga # tsà-si-khà <私は食べたい>

8) ma-Vn-sù : 基本型 V-ŋɛ に対して未然態を示す形式 (未だ……していない)

ga # kjà-ŋɛ <私は聞く> → ga # ma-kjàn-sù <私は未だ聞かない>

ga # wà-ŋɛ <私は作る> → ga # ma-wàn-sù <私は未だ作らない>

ga # ?é-ŋɛ <私は行く> → ga # ma-?én-sù <私は未だ行っていない>

9) V-kán-sù : 基本型 V-ŋɛ に対して過去の経験を示す形式。その否定は ma-V-kán-sù であらわされる。

ga # lá-ŋɛ <私は来る> → ga # lá-kán-sù <私は来たことがある> →

ga # ma-lá-kán-sù <私は来たことがない>

10) V-tshá : 基本型 V-ŋɛ に対して完了態を示す形式。その交替形として V-na-tshá, V-kha-tshá が認められる。

tsùŋ-tsuŋ # hjùŋ-ŋɛ <木が枯れる> → tsùŋ-tsuŋ # hjùŋ tshá <木が枯れてしまった>

mòŋ-mòŋ # hmiŋ-ŋɛ <マンゴが熟す> → mòŋ-mòŋ # hmiŋ-tshá <マンゴが熟した>

ni-ma # hùŋ-ŋɛ <これは大きい> → ni-ma # hùŋ-na-tshá <これは大きくなった>

ga # khó-ŋɛ <私は疲れる> → ga # khó-kha-tshá <私は疲れた>

11) V-ʔɔ : 基本型 V-ŋɛ に対して命令を示す形式

lá-ŋɛ <来る> → lá-ʔɔ <来なさい> : ?é-ŋɛ <行く> → ?é-ʔɔ <行きなさい>

12) ma-V (高平降型のトーンをとり母音を長くする) : 基本型 V-ŋɛ に対して禁止を示す形式

kjà-ŋɛ <聞く> → ma-kjà [mɛ₃ kjaɪ₄₄₁] <聞くな>
 sà-ŋɛ <食べる> → ma-sà [mɛ₃ saɪ₄₄₁] <食べるな>
 ʔé-ŋɛ <行く> → ma-ʔé [mɛ₃ ʔɛɪ₄₄₁] <行くな>

13) V-jà (高平降のトーンをとる): 基本型 V-ŋɛ に対して感嘆の語気を示す形式

mèn kha-ŋɛ <感謝する> → mèn kha-jà [₄₄₁] <有難う.！>
 kà-tsà-ŋɛ <勝つ> → kà-tsà-jà <勝った.！>
 kan-lán-ŋɛ <負ける> → kan-lán-jà <負けた.！>
 wà-khɔ-ŋɛ <仕事を済す> → wà-khɔ-jà <仕事が片付いた.！>

とくに否定形式による表現で、この já が使われる。ma-hmá-jà <本当だ.！> (直訳すると <うそではない.！>) ma-ʔa-jà <うそだ.！> (直訳すると <本当ではない.！>) しかし、*hma-ŋɛ, *ʔa-ŋɛ の形は聞かれなかった。

15. 連動式 group V の単語に、同じく group V の単語が結び付いて、2つの連続した動作あるいは主要単語のあらかず動作の趨勢方向を示すことがある。さきに音素体系の記述で例示したごとく、結び付く形式は、つぎの <行く> <来る> の意味をもつ4つの形式に限られる。

V-lá-ŋɛ <(上から)……して来る> V-lé-ŋɛ <(下から)……して行く>
 V-lú-ŋɛ <(下から)……して来る> V-ʔé-ŋɛ <(上から)……して行く>
 たとえば tsà-ŋɛ <食べる> → tsà-lá-ŋɛ <食べに来る> → tsà-ʔé-ŋɛ <食べに行く>
 ʔón-ŋɛ <入る> → ʔón-lá-ŋɛ <(上の方から) 入って来る>
 ʔón-lé-ŋɛ <(下の方から) 入って行く> → ʔón-lú-ŋɛ <(下の方から) 入って来る>
 ʔón-ʔé-ŋɛ <(上の方から) 入って行く>

これらの V-lá-ŋɛ などの形は、いわば漢語の 一上来、一下来、一上去、一下去 にあたる意味を一つの形で表現していることになる。

そして、<もって来る> háŋ-lá-ŋɛ と <もって行く> háŋ-ʔé-ŋɛ, <運んで来る> šù-lá-ŋɛ と <運んで行く> šù-ʔé-ŋɛ の対立もあとに結合される形式の相違で表現される。

また、group V の単語の性格によって、結び付き得る形式が限定されてくるのも当然である。tha-ŋɛ <起る> に対して tha-lá-ŋɛ <起き上る> はあり得るが *tha-lú-ŋɛ などは許されない。<到着する> khɻn-ŋɛ から khɻn-lá-ŋɛ <到来する> → khɻn-lá-jà <ああ、ついた.！> は作られるが、そのほかの形式はつき得ない。

これらの連動式は、V-V-ŋɛ 形と連動式でない形 V-ŋɛ が並存する点にも特徴がある。

16. ピス語には、同じように group V と group V の結合形であるが、V₁-V₂-ŋɛ のタイプのみで、V₁-ŋɛ は存在しない一群の単語がある。

tšù-ŋɛ <憶える>, tšam-ŋɛ <憶える> (tšam は N. Thai 語 cām からの借用),

kà-tsà-ŋɛ <勝つ>

これらは *tšùr-ŋɛ → tšùr-tsà-ŋɛ ではなく、あとの形式のみが可能である。この tsà-ŋɛ はもともと <食べる> tsà-ŋɛ と同じ単語であり、<おぼえる> は <記憶を食べる> と表現され、<勝つ> は <勝負を食べる> と表現される。チベット口語にも、これと並行した造語法がある。⁹⁾

17. ビス語の group V の単語の中で、自動形と他動形の区別が、音素形式の一部のみに対立をもった2つの形態素で示めされることが少なく、相互に関連のない音素形式をもつ2形態素で分割して表現されることが多い。たとえば

tsùŋ-tsuŋ hlùŋ-ŋɛ <木が倒れる> ga tsùŋ-tsuŋ tv-ŋɛ <私が木を倒す>
tsùŋ-tsuŋ ku-ŋɛ <木が乾く> ga tsùŋ-tsuŋ hlàw-ŋɛ <私が木を乾かす>

しかし、つぎのように2つの形態素の音素形式の一部の対立が、自動と他動といった職能のちがいをになっている例もある。

ga # ?a-mòŋ tšàj kla-ŋɛ <私は馬から落ちる> → kla-ŋɛ <落ちる>
ga # ?a-mòŋ tšàj khla-ŋɛ <私は馬から何かを落とす> → khla-ŋɛ <落とす>
làn # lúm-ŋɛ <水が温る> → lúm-ŋɛ <温る>
ga # làn hlúm-ŋɛ <私が水を温める> → hlúm-ŋɛ <温める>

この種の例は、極く限られた数しかない。¹⁰⁾ そのほかに、つぎの対立も認められる。

plòŋ-ŋɛ <穴をあける> → plòŋ tšhí <穴があく>
tšhit-ŋɛ <破る> → tšhit tšhí <破れる>

この V-tšhí は上に述べた使役態形式であると考えられるから、<穴があく>、<破れる> は被動の形で <穴があげられる>、<破られる> と表現されているのであろうか、よくわからない。

18. ビス語には group S の単語と group V の単語が連続して構成する一つの動辞表現がある。たとえば

jì tšhùr tšhùr-ŋɛ <くしゃみする>、 mè-bún bún-ŋɛ <夢見る>
tù-tshòŋ tshòŋ-ŋɛ <帽子を被る>、 sùŋ khə khə-ŋɛ <麦わら帽子を被る>

9) たとえば、中央チベット口語でつぎの表現による造語法がある。

sùr sà-wa <角をたべる=遠廻しにいう> khog-tšho sà-wa <怒りをたべる=怒る>
tshik-po sà-wa <燃えるのをたべる=怒る>

そのほか、ビス語でつぎの動詞のあとに -tsá が加えられる複合タイプがある。

<学ぶ> hlèn tsá-ŋɛ, <書く> tem tsá-ŋɛ, <読む> ?an tsá-ŋɛ

この3例の共通点は、hlèn, tem, ?an がいずれもタイ語からの借用語であることと、その意味が<文字> と関係することである。それ故、この -tsá の意味は<文字> であって、タイ語的な構文をとっているものと考えたい。

10) そのほか声調の対立が、つぎのような意味の対立をになっている場合がある。

phú-ŋɛ <解く> phù-ŋɛ <結ぶ> : -phí-ŋɛ <火を起す> phì-ŋɛ <閉める>

muŋ blàp blàp-ŋɛ <稲光がする>, ʔaŋ-ləj ləj-ŋɛ <泳ぐ>

これらの連続は、たとえば jì-tšhùt と tšhùt-ŋɛ の間に休止をおき得る上に、その否定形式は *ma-jì-tšhùt tšhùt とならないで、jì-tšhùt ma-tshùt, mè-búun ma-búun などとなるから、これらを、それぞれ2つの形態素から成る group S と group V の単語連続と見做すべきである。

19. 限定関係 group S の単語が group V の単語に限定されるときには、S-V の順に並べられる。group V の単語から成る動辞構文から、S←V の名辞構文への移項は、つぎのようになる。

tshán # hmón-ŋɛ	<人間は高い>	→	tshán hmón	<高い人>
lán hlón-ŋɛ	<水を熱する>	→	lán hlón	<熱湯>
lán hlúm-ŋɛ	<水を温める>	→	lán hlúm	<温水>
tshà-là # pjò-ŋɛ	<虎はしまがある>	→	tshà-là pjò	<縞虎>

タイ語からの借用語

20. 以上、バン・ルア・ピス語の音素体系および文法体系について、基本的な事柄を簡単に記述した。多くの点で不備なところがのこっているが、それらは資料の再検討と、今後の調査によって補っていきたいと思う。

最後に、ピス語に入ったタイ語からの借用語についてふれておきたい。

ピス語は、かなり多くの単語をタイ語から借り入れている。私が記録した単語 850 語の中で、約 150 語がタイ語である。それらの借用語は、いろいろの時期に、いろいろの形態のもとに借り入れられたものと思われる。ピス語の語彙全体から見れば、これらの借用語は、第一に新しい事物とともに入って来た単語、すなわち、それまでにあったピス語の語彙に新たに追加した単語として考えられ、第二には、さきあげた 3 以下の数詞のごとく、それまでに使われていたピス語の形式にすっかり入れ替った単語として、そして第三には、数詞 1, 2 のように、その大部分が置き換ったが、一部の環境では以前の形式と補い合って用いられている単語として考えられる。最後の例をいま一つ補うと、<年>を意味する形態素には 2 つあって、つぎのような分布を示している。

one year	two years	this year	last year
tù pi	ni pi	mi hnu	mi hnu šy

<一年> <二年> のときには、タイ語から借用した pi を使うが、<今年> <昨年> には、本来の形 hnu があらわれる。

借用された時期については、つぎの 3 つの大まかな分類が設定できると思う。1) もっとも古い層での借用語、ピス族がビルマあるいは雲南の地に居住していた時代に借り入れたのであ

ろう。北方タイ語・標準タイ語がもたない音素上の特徴を示す単語は、いずれもこの時期にビス語に入ったものと考えられる。たとえば <silk> ʔaŋ-hmáj (13世紀タイ語 hmaɰ), <oil> nam hman (13世紀タイ語 nam man <hman?>), <north> hùŋ hnɣ (13世紀タイ語 hniə), <to be easy> hŋàj-ŋɛ (13世紀タイ語 ɲaj <*hŋaj>), <blacksmith> tʂaŋ hlek (13世紀タイ語 dʒaŋ hlek), <to be pointed> hlém-ŋɛ (13世紀タイ語 hlɛɛm) の諸例に見られる hm-, hn-, hŋ-, hl- は古いタイ語の音素形式を保存している借用語である可能性が大きい。十二支をあらわす単語もおそらく、この時期にビス語に入ったのであろう。ビス語の十二支は、雲南にいる Thai lü 語の形にもっとも近い。¹¹⁾

第二の時期としては、ビス族がタイ国北部に移ってから以後の時代が考えられ、その地で北方タイ語から多量の語彙を借り入れた。数としては、この時期の借用語がもっとも多い。たとえば <to dye> ñəm-ŋɛ (N. Th. ñəm), <age of a person> ʔaŋ-ñu (N. Th. ʔa-ñu) の ñ- は北方タイ語を特徴づける初頭音素であり、<umbrella> tʂəŋ (N. Th. cəŋ), <clothes iron> tàw ñit (N. Th. táwniit), <market> kat (N. Th. kàat), <priest> sà-tu (N. Th. satu), <body> ʔaŋ-to (N. Th. tua) などは、標準タイ語にはない北方タイ語の特徴的な単語形式である。そして、第三に、ずっと最近になって標準タイ語から借り入れたと考え得る単語がある。<tooth brush> máj si fan (Thai: prɛɛŋ sǐ fan), <to read> ʔan-ŋɛ (Thai: ʔaan), <dish> tʂan-bɛn (Thai: caan-bɛɛŋ)。これらの単語形式は、北方タイ語形とはちがっていて、標準タイ語形に対応する。

この三つの時期を通じて借用された単語は、ビス語に受け入れられた形式からみると、つぎの三つのタイプに分けられる。1) タイ語形をそのまま受け入れている単語。上掲 <umbrella>, <market>, <clothes iron>, <tooth brush> などがそれである。2) 借り入れたタイ語をビス語的な形に改めている単語。上掲 <to dye>, <age>, <to read>, <to draw a line> などのごとく、ビス語の group S, group V の単語をそれぞれ特徴づける ʔaŋ-, -ŋɛ を借用語にも添加して、本来のビス語と同じ形をとらせる。第三に、タイ語からの借用語をビス語の形態素に結び付けて、新しい単語を形成するタイプがある。たとえば, ʔà-məŋ kip <hoof> は、ビス語の ʔà-məŋ <horse> にタイ語 kiip (標準タイ語, 北方タイ語) <hoof> からの借用語 kip を結合した単語であり, bi khit <match> はビス語の bi- <fire> にタイ語 máj khiit (標準タイ語) <match> からの借用語 khit を結合した単語である。中には、この種の結合形であると推定できるけれども、本来のビス語形がはっきりしない単語もある。<north> hùŋ hnɣ, <fan> pjàŋ wi はあとの hnɣ, wi はそれぞれタイ語の n̄ya, wíi からの借用形であるが、はじめの hùŋ, pjàŋ がビス語であるかどうかははっきりしない。そして、

11) 西田龍雄：「十六世紀におけるパイ・イ語—漢語, 漢語—パイ・イ語単語集の研究」『東洋学報』43巻3号, 1960. のpp. 46~47 を参照されたい。

この結合形が必ずしも古い時期の借用であると断定することもできない。たとえば、上にあげた <マッチ> が標準タイ語形特有の要素を含んでいることもその例である。

そのほか、タイ語形と形式が類似しているが、果してその借用語なのか、あるいは本来のビス語形なのか決定し難い単語もある。

<goods> ʔaŋ kʰŋ : Thai 語 khǒŋ <voice> ʔaŋ seŋ : Thai 語 sǎŋ
<to get drunk> màw-ŋɛ : Thai 語 maw <bed> ten : Thai 語 tǎŋ

ビス語に入った借用語全般と、その来源体として考え得る言葉との間の対応関係、ことに声調がどのように受け入れられているかは興味のある問題であるが、それらの問題は、ビス語以外の山地民言語一般について考察できる事実と関連して、改めて取り上げてみたいと思う。

付 記

なお、借用語の音素形式について少し補っておきたい。

<to count> dáp-ŋɛ は、タイ語 nab からの借用語であることは疑いがない。しかし、これは非常に古い段階の借用語であると考えられる。さきの報告で書いたように(『東南アジア研究』3巻3号 p.128)、ビス語ではある時期に(おそらくビルマの北方あるいは、中国雲南省にいた時代に)、有声鼻音ではじまる形式の一部が、有声閉鎖音に入れ替る一つの変化がおこった。すなわち、*ŋ→ŋg→g, *n→nd→d, *m→mb→b で代表させ得る一連の変化がおこった。本来タイ語であった *nap は、ビス語のこのような変化が起る以前に借り入れられて、そのほかのももとのビス語の単語、たとえば *ʔaŋ-ná <pain> が ʔaŋ-dá になったのと同じように、*náp→ndáp→dáp と変ったのである。これに対して、一方 <rice field> を意味する nà もタイ語 na から借り入れた単語であるが、これが dà とならなかったのは、ビス語がすでに *n→nd→d の変化を完了してしまってから以後に、この単語が借り入れられたためであると考えられる。この関係を、図示するとつぎのようになる。

	bisu word	loan word	loan word
	“pain”	“to count”	“rice field”
Earlier stage :	*ʔaŋ-ná	: *náp-ŋɛ <thai nab	: ×
	ʔaŋ-ndá	: ndáp-ŋá	: ×
Later stage :	ʔaŋ-dá	: dáp-ŋɛ	: nà <thai na